

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4370300727		
法人名	社会福祉法人 仁和会		
事業所名	グループホーム聖心園		
所在地	熊本県人吉市南町8番地1		
自己評価作成日	令和4年9月13	評価結果市町村受理日	令和4年1月12日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	https://www.kaiakensaku.mhlw.go.jp/43/index.ph
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構		
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205		
訪問調査日	令和4年11月22日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

当施設は、人吉の中心部近くにあり、周りには協力病院や小中学校もあってご利用者は通学風景も楽しんでおられます。また市役所やスーパーなども近く便利な場所に位置しています。利用者様がその人らしく過ごして頂けるように、家庭的な雰囲気づくりを心がけ一日中笑顔で過ごして頂けるように支援に努めています。
令和2年の7月豪雨の際は、幸いなことに当施設に被害はなかったものの、万が一の事を考慮して利用者様の安心安全を確保するため垂直避難ができる様に2階建ての避難塔を増築し今年の7月に完成しました。足の不自由な方も多く中で、負担も少なく速やかに避難できるようになりました。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

自然災害の猛威を経験したホームでは、垂直避難棟を増設し、毎月の避難訓練や近隣住民にも啓発を図る等危機管理意識を高めて臨むホームである。理念及び援助目標をケア規範として、家庭的で穏やかな生活の支援は入居者の落ち着いた自由な暮らしぶりに表われ、コロナ禍により地域の中へ出かける事に制限がある状況に室内での行事を工夫しており、夏祭り・運動会や童謡・東京音頭・民謡等を歌って過す等楽しみのある日常を支援している。勤務歴の長い職員も多く、管理者を中心として意思疎通の良い関係が、日常生活へのアイデアとして生かされる他、インシデント・アクシデントは全員で原因を精査する体制として職員の観察や気づき力が発揮されている。これまでの築き上げてきた地域での生活基盤は出来ており、コロナ感染症の緩和を視野にした地域の情報リサーチ等に大いに期待したい。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します+A17:T42

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	毎朝申し送りの際に、法人の基本理念とグループホームの援助目標を職員で読み上げ、職員間で共有し実践につなげている。	法人の理念及び援助目標の唱和により日々のケアに直結させてとしている。新型コロナウイルス感染症という難局に、地域との関わりに制限もある中で、母体法人の方向性に沿った運営として、援助目標の一つである安心と信頼（家庭的で穏やか、やすらぎのある暮らし）に注視して支援しており、家庭的な環境が形成されている。新年度には理念を想起した振り返り等、理念や目標をケア規範としているホームである。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	1年を通してながら母体施設と協働で行事を実施し、町内会やご家族と交流行っていたが、コロナ禍となってからは、行事も中止。面会、外出が制限されており、交流の機会は減っている。	例年であれば、地域の中での生活基盤は確立していたが、コロナ禍により今できる事で地域との交流を続けている。避難訓練の際は電話により周知を図り、ホーム周辺の散歩時の挨拶、ドライブで地域に出かける他、室内での行事を工夫しながら日常生活にメリハリを持たせている。	新年度には職員から地域との関わりについての意見が出されている。今後、感染症の緩和を視野に、入居者が地域に出る工夫を検討いただき、地域との交流が出来る時に備えていただきたい。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	入所者希望の際に認知症の症状等や援助方法等提供している。コロナ禍に入ってから、利用者への感染防止の為、施設見学は中止し相談については別の敷地にある居宅介護事業所の部屋を借り、対応している。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	コロナ禍で書面開催となっている。書面で頂いたご意見や質問に、次回の開催で回答している。頂いたご意見については施設内で話し合い、改善に努めた。また、今年度から他施設グループホームから構成委員として受け入れ意見も伺っている。	今年度は運営推進会議の年間計画を策定して開催している。感染症予防として書面開催でも事前に資料を配付し、各委員から開催日までに意見等を収集し、出された助言や指導等を次回の会議で提案する体制であり、充実した会議である。運営推進会議の要領開示が家族等が行政の考え方の共有や家族が意見等を挙げる機会として生かされている。また、知見者として他法人グループホームからの参加は交流のきっかけ等につながるものと大いに期待される。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	運営推進会議のメンバーに市の担当職員が入り、状況や状態等を報告し伝えているが、現在はコロナ禍で書面での開催となっているため、情報の交換は最小限となっている。	行政の指導により運営推進会議の開催方法を明確にし、書面審議とする中、活動・研修・ヒヤリハット・事故等の2ヶ月毎を詳細に報告している。今年度は運営指導を受け、避難誘導(初動)時の指導等適正なアドバイスを受けている。社協を通じた入居申し込みや介護認定更新を代行し、ホームでの調査に立ち会い、適切な情報を発信している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束防止委員会はコロナ禍であるため、3か月に一度書面開催を行い、研修資料等を書面で、職員に周知している。玄関は利用者安全の為、施錠している	法人全体で身体拘束廃止委員会を開催、コロナ禍により書面開催として全職員へ資料を配布し周知徹底を図っている。入居者一人ひとりの外出傾向や帰宅願望を把握し、多動や落ち着きが無い等の状況を全員が共有し、ケアを統一している。居室に設置しているナースコールを使用することが難しい状況に家族に説明し転倒防止や職員の早期察知としてセンサーを使用している。職員の言葉使いとしてグレーゾーンとしてあがる「待って」にはどのくらい待ってもらうかを伝えることとしている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	指針や、施設内研修を実施し、身体拘束と虐待との関係性について学ぶ機会を持っている。職員同士声掛け注意しながら取り組んでいる。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用されている方は現在居られず、部署研修で、職員が学ぶ機会を持てるように情報提供し共有している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約書に添って、改定時や解約も含めて、理解していただくように説明を行っている。最後に、不安や疑問がないかも合わせて確認させていただいている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	運営推進委員の構成員として家族にも参加して頂き、ご意見やご要望を伺っている。また、入所者のご家族にも会議の資料を送付し、ご意見も伺うようにしている。次の開催時にご家族へ報告している。	家族には日用品の持ち届け時や介護保険の更新に伴い調査表をもとに説明し家族の思いに向き合っている。運営推進会議の資料等も配布し意見などを収集する体制としたことで家族から忌憚のない意見等が寄せられている。例年であれば文化祭等家族との交流の機会を作っていたが、対面や窓越し等感染状況により面会方法を決めている。	家族へは電話により情報を発信されており、写真付きのハガキ等で発信することが検討されている。家族の不安軽減の一環として、検討されている事案を具体化されることが期待される。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月一度のケース会議や毎朝引継ぎ時、業務中でも随時、問題や課題があれば聞いて改善につなげ、連絡帳で共通理解を図っている。また個別でも話を聞いている。	管理者は日々ケアの中で職員とのコミュニケーションを図り、夜間の問題点等少数人数での話し合いや毎月のケース会議での意見交換により意見や提案はまずはやってみて、次回の会議で精査するとしている。職員と1対1の時に職員の意見等を聞き取りする等、風通しのよい関係が築かれ、キャリアパスの中で個別に話し合う等職員が意見や提案、悩み等を発信する多くの機会を作っている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	キャリアパス制度により年2回、育成面接を行い目標に向けての評価を行い、賞与などに反映している。また随時相談にはのっている。可能な限り希望休もとれるようにしている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	母体施設より、外部研修案内があった時や、施設内の研修でスキルアップを図っている。個人の弱点など、個別に指導しながら向上できるように努めている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	今年度より、運営推進会議に他施設のグループホームの管理者が入り、情報を共有できるようになった。ただコロナ過でもあり、書面開催となっており、書面を持参した時に現状を尋ねたりするのみで、交流までに至っていない。また年6回、グループホームのブロック会も中止される事が多く、交流の機会も減っている		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前にご家族へ様子を確認し、また入所されていたらその施設に状況を尋ね、ご利用者の状態やご希望、趣味などを把握、また安心、安全を確保するために生活の留意点の把握に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	上記の通り、家族の意向や、趣味嗜好など確認し、要望等も尋ねている。また入所初期には、連絡を取りながらご様子を伝えている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所時にご家族に話を聞き、どのような生活をされていたか、何を望まれているかを聞いて把握に努めている		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	介護する側とされる側ではなく、信頼関係、なじみの関係性を作り、家庭的な雰囲気でお互い助け合いながら(お手伝いなどをして頂きながら)自立支援に結ぶように努めている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で家族との関わりが減っているが、来訪時には、こちらから声をかけお電話があれば困りごとや心配事が無いかお尋ねしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	知人、家族もゆっくりご自分の部屋で楽しい時間を過ごしていただいていたが、コロナ禍となり、制限されている。制限される中、大切な関係が続けられるように母体施設に確認している。	家族等の訪問の制限や、馴染みの場所への支援は難しい状況にはあるが、車中から地域を回ったり、四季折々の行事、敬老祝賀会では二人羽織を披露したり、室内での夏祭り等工夫している。入居者同士がタッチングしたり、入居者同士が親類、入居者と職員は馴染みの関係にある。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	体操やレクリエーション、行事などを通して、利用者同士の交流が深まるように努め、話のきっかけを作ったり利用者同士の会話の橋渡しとなるよう配慮している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	退所後もお手紙を頂いたり、立ち寄ったりされてお電話もいただいたりしています。写真が残ってないと言われたら、施設で撮り、残っているものをSDカードに入れ郵送するなども行った。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	利用者の生活や行動の中から、職員同士情報交換したり、利用者の思いや意向が会話の中から聞かれれば、支援できるよう努めています。意思を伝える事が出来ない方については、ご家族に確認し添うように努めています。	日々の生活の中で思いや意向を確認し、外に出たいとの声には庭先に出られる事を伝えてる。また、入居者同士の会話や行動等により推察し、家族に確認しながら思いに応えている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入所時にご家族に話を聞いたり、訪問時に確認したり、暮らしてこられた環境など、何を望まれているかを聞いて把握に努めている		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	気づきの視点を持って、日々の生活の中で観察、状態把握に努め、職員とも情報を共有し状態の変化の把握に努めている		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	来園時や電話などで家族の意見を聴き取り、またケース記録を元にケース会議や必要に応じてサービスの見直しを行っている。モニタリングや介護計画も職員と確認し共有している。	本人や家族の意向(電話等により聞き取り)を基に、職員の気づきや観察した内容を話し合うとともに、モニタリングにより継続の可否を見極めている。毎月のケース会議やモニタリングを見直しに反映させ、人として当たり前の自立した生活を支援するための具体的且つ個別性のある介護プラン等が作成されている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	情報共有は連絡帳を活用して意思統一を図っている。日頃の様子や、気づいた点、改善案があった時は記録し、ケース会議で検討しケアの見直し、プランの見直しに生かしている。また経過観察を記録し後振り返りも実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者が何でも話せるように関わっている。本人や家族の希望があれば職員間で話し合い、ケア内容の変更や過去の体験、母体施設への相談などをして可能な限り対応するようにしている。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	母体施設と取り組んだ行事などに参加したり、近隣の幼稚園の運動会、近隣の花見など行っていた。床屋さんも来て頂き、カットして頂きながら会話も楽しんでいた。今年もコロナ禍で母体施設との行事もなくなり、地域との交流も減っている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入所契約時にかかりつけ医は、ご家族と相談し決定している。通院はご家族の協力を得て付き添いをお願いし、利用者の状態などを主治医に対し文章での情報提供を行い、必要によっては家族と同行し、アドバイスを伺っている。	入居契約時にかかりつけ医について既望を聞き取りするとともに、本人及び家族の意向を優先する旨を説明している。現在は全員が母体医療機関をかかりつけ医として家族による受診体制とし、主治医から直接説明を受けることで入居者の状態を共有している。遠方の場合には職員が受診に同行しその結果を報告する体制としている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者との関わりの中で、表情や体の変化、食事量や排泄の記録などを見て、その状態を随時看護師に報告し、必要に応じて病院受診につなげ、早期の改善につなげている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	緊急時の搬送はもちろんの事、入院迄の経緯やADLの情報、認知面についての情報を提供している。家族からも情報交換を行い、病状が安定されれば、病院関係者やご家族等のご意向を聞きながら対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入所時に重度化された場合の指針を説明を行っている。また機能が徐々に低下された利用者ご家族に対し、ご家族の希望を確認しながら看取りについても話し合いを行っている。また母体施設である特別養護老人ホームの話しながら必要に応じ入所申し込みを行っている。	入居時に“重度化の指針”を基に方針を説明している。日常的な医療行為の必要が無く、家族の希望があればホームでの看取りが可能であるとして、主治医や家族の協力のもと支援している。職員は終末期ケアや痛みの緩和、家族への支援のあり方など母体の看護師による指導を受け、認識を深めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	急変時や事故発生時にも慌てないように、マニュアル化したり、職員が不安視するところを話し合い、対応できるようにしている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	毎月避難訓練を実施、水害対策として敷地内に2階建ての避難棟も完成し、訓練を行っている。夜間での対応も職員全員が身につけるよう交代で実施。防災や消防署からの指導も受け、地域の消防団への協力も得ている。備蓄は母体施設に備えている	毎月の避難訓練や避難確保計画に基づき訓練を実施。消防署及び業者立ち会いの消火訓練等地域に周知を図っている。一昨年の大水害を経験したホームでは、この夏垂直避難用の棟を増設し、「水害避難マニュアル」を確認し実際に避難体験を実施している。又、この夏の大型台風接近(球磨川氾濫のおそれありとの情報)により実際に垂直避難し、備蓄食事を提供している。また、シェイクアウト訓練にも参加している。	避難訓練前の近隣への事前告知、職員の役割分担、運営指導による”初期対応マニュアル”の掲示場所の検討等防災意識を高くして臨むホームである。今後も備蓄の補充について、リストに沿った点検に取り組まれることを期待したい。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	利用者の個々の個性や人柄、プライバシーへの配慮など、研修会を含め、随時スタッフとも話し合いながら言葉づかいなど気を付けている。利用者の訴えを否定せず傾聴する姿勢をもって対応している	長年の関係性から職員は入居者一人ひとりの個性や人柄を把握している。呼称については苗字を基本としながら、下の名前を望まれる方には希望に応じている。入浴や排泄支援はプライバシーに十分配慮して対応している。また、帰宅願望のある入居者の思いを受け止め、話に耳を傾けるよう努めている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	ふれあいや会話の中で本人の思いや心配事が聞かれる。職員全体で情報を交換、共有し家族に御協力を得ながら、支援を行っている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	家庭的雰囲気の中で、職員の都合を優先せず、利用者の希望に出来るだけ添える様に努めている。高齢化に伴い、他の方の対応で時間を要した時は、理由を伝え待つ頂く事もある。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	朝からお化粧をされる方については、出来る環境を作り、また洋服を一緒に選んだり、ご意向を確認しながら、それぞれ持っておられる力に沿って対応している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	本日のメニューを伝えながら、利用者の反応なども確認。特殊食器を使用して、出来るだけ自分で摂れるように支援したり、エプロンの準備、後片付けなど本人の力量に合わせて一緒に行っている。季節、行事食なども楽しみにされている。	食事は本体施設で調理されたものであり、ホームでは朝食時の味噌汁を手作りしている。1週間毎にメニューが届き、食事前には献立を紹介しながら、なるべく自分で食べてもらうようにしている。入居者もテーブル拭きや後片付け、皿洗いなど出来ることで食に関わり、時にはたこ焼きパーティ等を企画しながら入居者の出番の機会を作っている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	利用者の嚥下状態に応じて、食事形態、摂取の仕方を工夫して提供している。食事量や水分量をチェックし、利用者の状態も確認。水分が摂れにくい方については、好みのものを準備。食事量が少ない時は職員間で情報を共有している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、一人ひとり口腔ケアを行っている。ご自分でできる方は見守りしながら声掛けをし、出来ない方は、介助。同時に洗口液や洗浄剤なども使用しながら清潔に努めている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	利用者が、落ち着かれなかったり、動きが見られた時は、お尋ねトイレに誘導。また訴えなどもない方も定期的にトイレの声掛け、誘導を行っている。排泄チェック表で排泄パターンを確認しながらパット類の使用も減らせるように努めている。	個々の排泄パターンや様子を見ながらの声掛けや誘導等によりトイレでの排泄を支援し、自立されている方であっても失敗も見られるとして、自立を尊重しながら声を掛けている。時間帯や入居者の状態により排泄用品を使い分けているが、ベッド上での排泄用品の交換の方が排尿後に職員に伝えられる等入居者の力を大切にしている。夜間のポータブルトイレ使用には、日々の洗浄消毒と月1回トイレ本体を洗い清潔に管理している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	薬以外では、食事のバランスを考え、食物繊維を含んだ料理を提供。水分摂取量も把握しながら、摂れない方には好まれものを検討し、摂取できるように工夫している。また主治医、看護師と相談し個々に応じた便秘予防に取り組んでいる。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2回の入浴で、それぞれ曜日に沿って利用者の入浴日も決まっているが、利用者の意向に沿って時間や日程の変更を行っている。入浴を嫌がる方は居ませんが、常に楽しく入浴できるように支援している。	週2回入居者の希望を聞きながら入浴日を設定している。強い入浴拒否は無いが、元来入浴自体が好きでは無い方がおられ「今日はいいです」とはっきり意思表示されるようである。入浴日以外にも、汚染時にはシャワー浴等で対応し、懐かしい歌を歌ったり、昔話をしながらゆっくりとした入浴を支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々の睡眠状況、昨夜の様子をスタッフで共有し、日中は昼夜逆転されない程度に体を休めてもらうように支援。夜間も寝付けないときには音楽を流したり、眠くなるまで一緒に過ごすように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人ケースに薬の情報書を綴っており、常に確認することができる。服薬によっての利用者の状態や変化など看護師、職員と情報を共有し、必要に応じて主治医にも相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	個々の好みを確認しながら軽体操、カラオケ、学習療法やADLに合わせて役割と出来ることをお願いしている。天気の良い時は外に出て昔にしゃぼん玉などのレクリエーションで楽しく過ごせるように工夫している。毎月、季節に合わせた行事も実施している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	全体では、庭に出て花を眺めたり、散歩したり、レクリエーションもしながら気分転換を図った。また母体施設までの散歩や花見を実施。個々の希望も応えるように支援に努めている。今はコロナ禍で地域の方々とも接する事が出来ず、また自由に外出が出来ていない状態。	感染症の影響から外出に制限がかかる中、入居者の中には「どこにも行かれん」と口にされる方もおられるようである。庭先に出れば季節の花を愛でたり、家族や職員との受診も外に出る機会として捉えている。本体施設での行事などは中止されているが、天気の良い日の散歩や花見等は入居者の楽しみとなっている。	月毎の行事やレクリエーション等室内活動の充実し、外出の代わりとなるよう工夫されている。人吉の情報をリサーチし、今後も入居者に日常を楽しんでいただくよう、ユーチューブや雑誌等を活用されることも良いと思われる。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	現金は基本ご家族に管理して頂いているが、ご家族に了解を得て、お金を持っておられる方もおられる。今はコロナ禍で外出が禁止されていることもあり、買い物する事もなくお金を使うこともない。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者との会話の中から、心配事など聞かれた時などはご家族に伝え電話を受けて頂いている。手紙が書ける方については、環境を作りやすめなど支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	ホールは、四季に合わせた装飾品を飾り、季節感を出すようにして、利用者にも季節を感じたり理解できるように努めている。ウッドデッキへも出る事が出来、季節を肌で感じることもできる。共用空間は毎日清掃に入り、換気、消毒、空調管理を行っている。	玄関周りには季節毎に花を植え、入居者の目を楽しませている。リビングの飾りは季節感を味わってもらおうよう工夫を凝らし、テーブルはパーティションで感染対策を施している。入居者の状態や関係性から席の配置を検討し、避難時の動線に配慮している。ホーム前が通学路となっており、登下校時の小学生に手をふり挨拶をされるようである。換気や消毒など徹底し感染防止対策を徹底している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	利用者の関係性を考えながら席の移動を行っている。ソファ等を活用して本人の意向を確認し、安楽に休める場を提供。横になりたい希望があれば随時休んで頂き、個々の居室で横になりながらテレビを見たり、友人が訪問し居室で談笑されたりしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	ご家族の協力を得て、居室は写真を飾ったり、馴染みの物を持ってきていただき、居心地の良い部屋づくりに努めている。	新たな入居者には自宅で使っていた慣れ親しんだ品を持参されるよう伝えている。テレビや小型のタンス、布団類が持ち込まれ、出窓には家族からの手紙を飾る方もある。担当職員は衣類を確認したり、こまめの掃除で気持ちよく過ごしてもらうよう心がけており、居室が分からなくなる方へは入り口に名前と顔写真を目印とする等個々の状態を把握して居室環境を整えている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	居室も出来るだけ危なくない様に物は置かないようにし、見守りの中ご自分で移動できるように配慮している。また認知症状が進み居室、トイレの理解が無い方については表札やトイレまでの誘導表示など貼りご自ら移動できるように対応している。		